

# わさドラ8年目に思うこと

農学研究科 M1 中野 周平

えっもう新しい方のドラえもんって8年目なの！？とびっくりした方も多いと思う。そう、2005年の4月にドラえもんがリニューアルしてからもう8年目に突入したのだ。この文章では、ほぼ欠かさずわさドラを見続けてきたうえでの僕の考えを、アニメ・ドラえもんの簡単な歴史をふりかえりつつ書いていく。わさドラだけでも7年半分あるので、大雑把な内容になるけれどそんなことは気にしな—い！(笑) わさドラに馴染みのない方にも分かるように、わりと事細かに説明しているはずだが、当然マニアックな内容にはなってるのでそのへんはご諒承いただきたい(笑)。これを読んで、わさドラに興味を持っていただければな—と思う。

そして最後に、アニメ・ドラえもんを含む藤子・F・不二雄作品のこれからについても考えてみたい。

## ■同好会が柱にしている考え■

まずはじめに、アニメに対する京都大学藤子不二雄同好会としての考えについて述べておく。(というより、同好会を設立した僕がメンバーに共有して欲しいスタンスでもある。おしつけがましいけど創立者としてのわがままなんで許してください笑)。

それは、「原作がなによりも基本であり、アニメはあくまで二次的なものである」ということを頭の片隅においておく、というものだ。特にドラえもんにおいては、大山ドラとわさドラとの比較がよくなされるが、両者とも漫画ドラえもんという土台の上に対等に立つものとして扱うべきだと考えている。もちろん、極端に原作主義者になっちゃって「原作以外は二次創作物だからアニメなんて見ない！」とかいうことになっちゃうと勿体無い。アニメはアニメでとっても魅力的だし大好き。名作も数多くあるし、存分にアニメを楽しむことは大事なのだ(そもそもアニメ映画の上映会がメイン活動の同好会ですしね…笑)。このスタンスをもちつつ、以下のアニメについての議論を進めていく。

## ■アニメドラの歴史■

本題に入る前に（まだかよ！）まず、アニメ・ドラえもんの歴史について簡単に触れておく。

1969年12月に漫画の連載がスタートしたドラえもんは、1973年4月に日本テレビ動画によってアニメ化された（第1作）。ドラえもんの声優ははじめが富田耕生で、2クール目からは野沢雅子に交代したものの半年で放送が終了した。いわゆる「旧ドラ」とファンの間で言われているものである。現在、本編を視聴することはものすごく難しい。ほぼ不可能。

続いて1979年4月からドラえもんはシンエイ動画によって再アニメ化される（第2作・第1期）。大山のぶ代がドラえもんの声優をつとめた。このアニメ・ドラえもんは人気を博し、映画も毎年つくられるなどして26年間も続く長寿番組となり、2005年3月まで放送された。ここではこの第2作・第1期のアニメ・ドラえもんを「大山ドラ」と記述する。

そして2005年4月にアニメ・ドラえもんはリニューアルされた（第2作・第2期）。制作は大山ドラと同じくシンエイ動画だが、スタッフ・声優・キャラクターデザインなど大幅に変更された。ドラえもんの声優は水田わさびが担当。この現行のアニメ・ドラえもんのことを「わさドラ」と呼ぶことにする。以下、このわさドラについて、僕の個人的な意見というか感想を書いていくつもりである。

## ■わさドラへのリニューアルにむけて■

アニメドラリニューアルにまつわる各種出来事を、当時の僕の感想を交えながら記していこうと思う。

**2004年7月12日**：2005年の映画の制作休止が藤子プロ公式サイトで公表される。

▶1996年の藤子・F・不二雄先生の没後、目に見えて質が落ちていっていたアニメドラ。原作はほぼアニメ化し尽くし、およそドラえもんらしくないオリジナル話と再放送の繰り返し、OP・EDの頻繁な変更など、子供心に「そろそろドラえもんもダメなのかな…」と感じつつも惰性で見ていたこともあって、この公表を知った時は、映画ドラえもんが観れないことに関するショックはあったものの、半ば諦めの感覚もあっ

た。

**2004年11月21日**：大山さんら声優の降板・若手に交代との発表。

▶映画休止に続いて世間を揺るがした。この時点では、主要5人が降板するという情報のみだったため、キャラデザや制作路線は現行のままでただ単に声優が変わるだけだと認識していた。当時のドラえもんの状況のまま声優だけ変えてもなぁ…と心配していた中学三年生の僕(笑)

**2005年1月14日**：コロコロコミックに新キャラ設定掲載。原作回帰指向公表。

▶僕は『ぼく、ドラえもん。23号』でこのことを知った。単に声優が代わるだけではなく、キャラデザなど根本から変わり、原作の話を一からアニメ化し直す、ということを知ってもものすごく興奮したのを覚えている。「原作回帰」を前面に押し出したそのコンセプトに感激した。シリーズ監督の善聡一郎さんの言葉「25年やっている間に、ちょっとのび太の保護者みたいになってきたドラえもんにも、本来のだめロボットに立ち返ってもらって、もうちょっとフレンドリーな感じをもたせたいですね」が実に頼もしかった。

**2005年3月12日**：新声優決定の報道記者会見、翌日お披露目。

▶声は結局放送スタートまで聞けなかったが、五人とも年齢が若いなぁという印象が強かった。特にジャイアンは僕の1つ下だったので(笑)

**2005年4月15日**：新作放送スタート！！

### ■わさドラがはじまった！■

2005年4月、わさドラがスタートした。いままでとはまったく違う絵柄と声と雰囲気のアニメ・ドラえもんを目の当たりにして、新作アニメを見ている気持ちに(笑)。そう、これは大山ドラとはまったく別のアニメなのだ。一番最初こそ違和感があったが、すぐに慣れ、原作寄りの丸っこい絵とわんぱくなドラのびのやりとりにハマってしまった。言い回し、表情などいたるところに原作らしさがあって、待ってましたと

言わんばかりの歓声を心のなかで叫んだ記憶が。最初期で一番好きなのは「どくさいスイッチ」。絵柄・ストーリー共々オススメ！

…というようにはじめは新鮮な感動を与えてくれた新生ドラえもん。服の色が毎回違うというのもグッとくるポイント。原作では色んな服着てるから個人的に着たきり雀は嫌なのだ（笑）やや誇張した言い方をすればまるで漫画がそのまま動いているという感じ。しかし、それが段々と「堅さ」に向かってしまった気がする。漫画の絵柄に似せる方を優先するとアニメとして動かしにくいのかもかもしれない（アニメーションに詳しいわけではないので単なる予想であるが）。原作回帰ゆえの厳しさなのかなぁ。

ストーリーも、もちろんワクワクするときも多いのだが、原作にアニメオリジナルの妙なアレンジが加わって首を傾げる展開になってしまうことが多々あった。まあ原作回はまだそのくらいで大丈夫だったけど、アニメオリジナルストーリーのクオリティは正直ダメダメだった。特にスペシャル放送の時のアニメオリジナルストーリーに対する不安感は非常に高かった…。それよりもひどかったのは、二年目あたりから見え始めた妙なテコ入れ。毎回良くわからない実写のミニコーナーを挟んだり、〇〇シリーズと銘打って偏ったストーリーの選び方をしたり、話題性のためだけとしか言えないような芸能人起用のストーリーを作ったり、ギャグ話を無理やり感動話にアレンジしたり。各話のタイトルも、妙な煽り文句が冒頭に入るようになった。正直この頃は苦笑いすることが多かった…。

### ■わさドラの変化■

ということで数年落ち込んでいたわさドラだが、次第にまた力をつけてきた。原作ストーリーの回は、原作のいいところをうまく使いつつアニメならではの展開も当たりが多くなってきた。オリジナルストーリーの回は、「わさドラ」らしい展開、すなわちドタバタメインのカオスな話で、どちらかというとな原作らしくない場合もあるがそれはそれで面白い。少し前までの、オリジナルストーリーに対する不安感は相当少なくなつたといえる。ごく最近の話になると、キレのいい動きがすごく多くなってきて、アニメーションとして純粋に楽しめる。2007年に一度キャラデザが改訂され、最初よりも絵柄が原作から少し離れたが、アニメーションとして動かしやすくなったのではないかと推測している。その効果もじわじわと出てきたんじゃないかと（想像）。

はじめは「原作回帰」を大々的に謳っていたわさドラ。新鮮味の効果が薄くなって「アニメ」として、そして「わさドラ」としての魅せ方を模索していた数年間。そしてここ最近、あたかも「わさドラ」らしさを引き出す方法を習得したかのように急激に質が上がってきた。そこに見えるのは、原作らしさを尊重しつつもそれに固執せずアニメとしてのわさドラの味を最大限魅せてくれるアニメ・ドラえもんである。いま、わさドラは黄金期にあると言っても過言ではないだろう。毎週のように大笑いして、次週が待ちきれない。

これからわさドラはどのような道を歩んでいくのだろうか。

最近の傾向として、アニメオリジナル回の増加が挙げられる。一回の放送のうち、Aパート Bパート共にアニメオリジナルストーリーである時もある。そして、その多くはツッコミ不在のぶっ飛んだカオスなギャグ展開（笑）。原作初期に見られるギャグテイストが面白い方向に拡張して、これがわさドラの持つ雰囲気にあっていたのだと思う。（たまにハッチャケ過ぎ且つ原作ドラえもんっぽくない感が否めないものもあるが、それはそれで別の方向に面白いからいいや…というのは安易かな笑）。今後、こういったギャグテイスト満載のオリジナルストーリーがますます増えていくだろうと予想される。空回りしない程度の良質のギャグ回を楽しみにしたい。

そして、ギャグだけではない。もうひとつわさドラを語る上で欠かせないのは、大山ドラの映画同時上映であった感動中篇シリーズや、「恐竜 2006」「緑の巨人伝」の監督を手がけた渡辺歩氏が残した、人情味あふれる演出である。見ている人にはわかると思うが、夕焼け+坂道のシーンなどはその典型であろう。ヒューマンドラマを見ているかのような情景は、わさドラの大きな魅力の1つである。感動ストーリーでこれがいかに発揮されていると思う。

オリジナルストーリーの増加の一方で、やはり原作のアニメ化が少なくなっではよろしくないと思う。原作回は原作回で、最近本当にクオリティーが高いことが多いし、そもそも、「F先生が手がけた作品をアニメで見たい」という思いがどうしても強いものもある。やはり原作のアニメ化を中心に据える方針は緩めないでほしいというのが本音でもあったりする。

原作回・オリジナル回、そしてギャグ回・感動回。緩急おりませた、幅広い面白さをもったわさドラを、これからも応援していきたい。

同好会では、会員にわさドラをなるべく意識的に見て欲しいという思いもあって、

毎週、当番制で会員に感想をブログに載せてもらうことにしている。ネット上に、アニメドラえもんの感想をあげているブログはそれなりにあるが、複数人によって更新されている感想ブログは珍しいと自負している。アニメドラえもんを是非みていただいて、もしよかったらこちらもご覧下さいねー。

<http://ameblo.jp/f-kyodai/>

### ■第三次藤子ブーム■

前述したように、わさドラはいま黄金期の真っ只中である。そして、これを含めて、第三次藤子ブームと言ってもいい状況にいまはあると僕は思う。オバQが空前絶後の大ブームとなった第一次藤子ブーム。ドラえもんがヒットし、他の藤子作品が次々とアニメ化されていった第二次藤子ブーム。これら2つに比べれば今は“ブーム”とは言えないかもしれない。しかし、一時のときを思えば、たしかに今は藤子ブームなのである！

### ■藤子・F・不二雄ミュージアム■

昨年、2011年9月3日に開館した「藤子・F・不二雄ミュージアム」。僕はこれが第三次藤子ブームの柱であると考えている。連日、全国津々浦々の老若男女が川崎市にやってくる。親が藤子作品が大好きだったり、子供がドラえもん大好きだったり。ミュージアムに来ることで子供はドラえもん以外のF作品に触れ、関心を持ち、これが新たなファンの獲得に非常に貢献している。知り合いの子供が「チンプイがどうのこうの」「コロ助がどうのこうの」と楽しそうに言っているのを聞くと、ああ、これはブームが来ているんだと確信するのだ。そしてもちろんだが、ミュージアムは僕のような根っからのマニアの心をも当然熱くさせてくれる（笑）。

このようにミュージアムによって第三次藤子ブームと言える現象が起きているのだが、その前に2009年7月から、「藤子・F・不二雄大全集」が発売されている。「あらゆる世代の藤子ファンが集まるミュージアムに、どうしてもF先生のすべての作品が読める全集を置きたかった」というのが原動力であったようだ。かくして大全集が発売されたのだが、これを境に藤子界隈が賑わう下地が固まった印象がある。これまで、名作揃いの藤子作品はその殆どが絶版で、万人が読める状況ではなかった。あのオバ

Q できえ絶版だったのだ。当時、大全集発売のニュースを聞いて、飛び上がって喜んだのを覚えている。藤子関連のサイトやブログを見ても、その興奮がいかに大きかったかわかる。

ブームを確かなものにした藤子・F・不二雄ミュージアムの構想は1999年にさかのぼる。藤子プロによる事業プランの練り上げなどにより最終的に市政がOKを出した2004年が事実上のキックオフだと考えられるようだ。そして2007年には2011年秋のミュージアム開館が正式に発表された。

### ■ ドラえもんリニューアルの効果 ■

ここまで来て僕はふっと思ったのである。いまの第三次藤子ブーム、その目に見える最初の大きな動きは、2005年の新生アニメ・ドラえもんの開始だったのではないかと。大全集刊行と同じように、実はドラえもんのリニューアルもミュージアム開館にむけてのプロジェクトの一部だったのではないかと…？

もし、アニメドラえもんの“原作回帰”を掲げたりリニューアルがミュージアム開館に向けたシナリオ上にあったのだとしたら…？ いやいや、多分そんなことはない、絶対にない。でも、もしそうだったら…と想像すると、色々なものが原作という1つの道の上を走っているかのような不思議な錯覚に陥るのだ。いや、こういう推測はすべきではないのかも…と思いつつ、ここに記してみた。みなさんはどう思われるだろう？

アニメとミュージアムとの関係はとても深い。オープン前はブリッジアニメとしてミュージアムオープンのカウントダウンをしていたし、いまでもたまにミュージアムのごことがミニコーナーで取り上げられる。オープンを記念して新曲『F組あいうえお！』が作られ、ドラえもんの放送のなかで他のFキャラクターが動くという感動に浸ったものだ。そして来年の映画ドラえもんは『ひみつ道具博物館(ミュージアム)』である。藤子・F・不二雄ミュージアムを意識していないはずがない。ミュージアムの側も、ドラえもんの最新映画に合わせた撮影スポットをつくったりと、アニメと連携している様子がよくわかる。

ミュージアム内のFシアターで見られるオリジナルアニメは、どのキャラクターも原作を意識したような作画である。もし大山ドラが続いていたら、作画はどうなっていたのだろう。大山ドラっぽくいくか、それとも今のような作画なのか。どちらにし

ても、相当な違和感があったと思う。(他の作品はアニメ終了から随分と期間が空いているのでさほど違和感を感じない…? ように思うので。) 原作の絵に近づけたわさドラだからこそ実現出来たといえれば言いすぎだろうか? ?

なんとも強引な理屈付けかもしれない。僕が文章を筋道立ててかくのが苦手なのでご諒承ねがいたいところではあるが、なにぶん感覚的というか直感的な話が多いので、仕方ない(笑)。上に述べたことは相当僕個人の勝手な考えが含まれているので、そういうものとして捉えてもらいたいのだけれど、このように、ここ数年における藤子・F・不二雄をめぐる幾つかの動きが全て、原作という道を通してミュージアムにつながっているのではないかという気がするのである。

## ■最後に■

なんだかまとまりのないまま 6000 字を超えてしまった (笑)。アニメドラえもんの歴史からはじまって、わさドラの開始、その内容の変化、そして黄金期。それと同じタイミングでの第三次藤子ブームとミュージアムの盛り上がり。このブームにはアニメドラえもんのリニューアルが欠かせない存在だったかも…?

僕は、F 先生の作品が好きだ。内容はさることながら、なんといっても絵柄がとっても魅力的なのである。なので、原作寄りの作画であるわさドラにどうしても肩入れしてしまうところがあって、そういう頭で書いた文章なので最後の方などは偏ったしてんで話を進めてしまったかもしれない。でも、客観的に見ても、いまのわさドラはアニメとしてとっても面白い作品であるのは間違いないように思う。最近あまりドラえもんなんて見てないよーという方も、この文章を読んで少しでも興味を持っていただけたら、ぜひともドラえもんを見て欲しい! そして何より、原作も読んでもらえたらもっといいなとか思いながら、僕の文章を閉めようと思います。

この第三次藤子ブームにのっかって、新作藤子アニメが制作されて、TV で視聴できたらいいな!



## 参考資料

『藤子不二雄ファンサークルマガジン NeoUtopia 第40号』2005年

『藤子不二雄ファンサークルマガジン NeoUtopia 第52号』2012年

『ペン・プラス 完全保存版 大人のための藤子・F・不二雄』2012年

『ぼく、ドラえもん。23号』2005年